古典文学鑑賞辞典

西沢正史 編

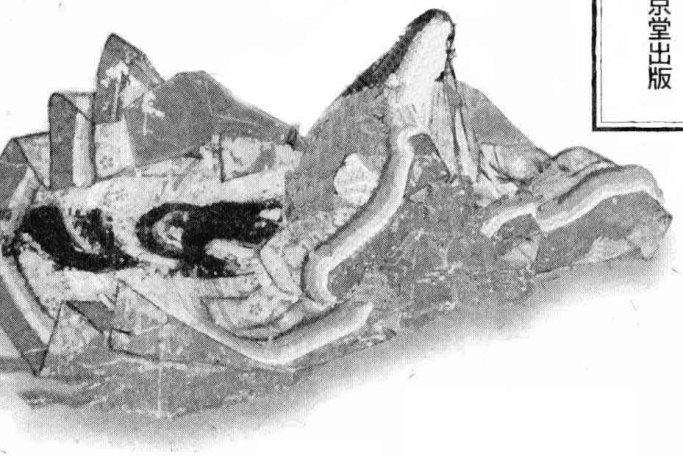
東京堂出版

古典文学鑑賞辞典

西沢正史 編

東京堂出版

江苏工业学院图书馆
藏书章



西沢正史
東大大学院修了。駒沢女子大学教授
著書＝『源氏物語忍草』『女たちの源氏物語』『増鏡研究序説』『女流日記文学講座』『源氏物語を知る事典』など多数

古典文学鑑賞辞典

平成一一年八月三〇日　初版印刷
平成一一年九月一五日　初版発行

編者　西沢正史
発行者　大橋信夫
印刷所　㈱CTE

発行所　株式会社　東京堂出版
東京都千代田区神田錦町三丁目七番地
電話　〇三―三二三三―三七四一　振替　〇〇一三〇―七―二七〇
〒一〇一―〇〇五四　製本　渡辺製本

ISBN4-490-10525-8 C1591
Printed in Japan
©Masashi Nishizawa
1999

はじめに

日本文学の歴史は、千五百年以上の長きにわたって、豊饒多彩な様相を呈してきたが、その複雑な内容を短時日のうちに把握するのは必ずしも容易ではない。だが、個々の作品を読むにあたっては、その作品の文学史的な定位をはかる必要があるはずである。本辞典は、そうした古典文学の入門的な要請に答えるべく編纂されたものである。

世上に公刊されている文学辞典の類は、概して読者がすでに作品を読んでいるという前提のもとに書かれたものが多く、ごく簡略な内容紹介と高度な解説に終始しているようである。思うに、辞典の読者（利用者）は、作品を読んでいないか、作品に対して未知だからこそ、辞典を利用するのであろう。

なかには、辞典というものが最大公約数的な利便性が必要であるのに、特定の人にしかわからないような難解な表現、一般性を無視した研究論文スタイルのものも見受けられる。それは、執筆者として学界の一流研究者を揃えるという建て前とは裏腹に、辞典執筆に向いていない人を強引に頼んだりするような辞典編集の特殊事情によるものである。本辞典は、独善的で難解な研究論文風の辞典からできるだけ遠いスタンスで編纂したものである。

本辞典は、従来の辞典の弊を少しでも是正すべく、次のような方針によって編纂した。

一、高校・大学の教科書で取りあげられている作品・作家、カルチャー講座やマスコミなどで話題になっている作品・作家を中心にして、新しい視点によって項目を選択した。

二、特に『万葉集』『源氏物語』『平家物語』の三大古典については、主要登場人物を項目に立てて、人物論風に叙述した。

三、本辞典の初めに各時代ごとの概観を示し、各作品・作家が、どのような歴史的な流れの中に位置しているか、いかなるジャンルの中で他の作品・作家と関わっているか、といった点が明らかになるように工夫をこらした。

本辞典は、右のような方針のもとに、学界の新進・中堅の研究者に鋭意執筆していただいた原稿を、編者が一般向きの辞典としての性格を考慮して修整・統一して成ったものである。

執筆者の先生方には、出版社の要請から、いろいろとご無理なお願いをしたこともあったかと思うが、いつも快くご協力いただいたことを、編者としては重ねて深謝する次第である。

平成十一年七月七日　乞巧奠の日に

編者　西沢正史

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

古典文学鑑賞辞典　項目一覧（目次）

古典文学の歴史概観

〔上　代〕

古事記……一五三
風土記……三一六
万葉集……三八二
額田王……三八五
柿本人麻呂……三八七
山部赤人……三九〇
山上憶良……三九二
高橋虫麿……三九四
大伴家持……三九六
東　歌……三九八
防人歌……四〇〇

〔中　古〕

（作り物語）

竹取物語……二四八
宇津保物語……二五四
落窪物語……二六八
源氏物語……二〇八
光源氏……二一五
藤　壺……二一七
六条御息所……二一九
朧月夜……二二〇
空　蟬……二二二
夕　顔……二二三
末摘花……二二四
明石の君……二二六
玉　鬘……二二七
女三の宮……二二九
紫の上……二三一
大　君……二三二
浮　舟……二三三
狭衣物語……一七〇
浜松中納言物語……二〇〇
夜の寝覚……四二九
とりかへばや物語……二八〇
堤中納言物語……二六六

（歌物語）

伊勢物語……三一
大和物語……四一八
平中物語……三五五

（歴史物語）

栄花物語……六〇
大　鏡……六二
今　鏡……三七

（説話文学）

日本霊異記……二九二
古本説話集……二六二
今昔物語集……一六四

（日記・随筆）

土佐日記……二七八
蜻蛉日記……八一
和泉式部日記……二八

紫式部日記……四〇八
更級日記……一七四
讃岐典侍日記……一七三
成尋阿闍梨母集……一九六
枕草子……三六九
（和歌文学）
古今和歌集……一四五
紀貫之……九四
在原業平……二五
小野小町……七〇
八代集……二九九

〔中　世〕

（鎌倉物語）
松浦宮物語……三八〇
住吉物語……三三
しのびね物語……一八八
有明の別れ……二三
石清水物語……四〇
苔の衣……一四九
夢の通ひ路物語……四二
＊
無名草子……四〇五
風葉和歌集……三〇九
（室町物語）
文正草子……三三〇
物くさ太郎……四一六
猿源氏草紙……一七七
酒呑童子……一九三
三人法師……一八三
秋夜長物語……二一
福富草紙……三一一
（説話文学）
宇治拾遺物語……五〇
十訓抄……一八五
古今著聞集……一五一
発心集……三六七
撰集抄……三三〇
沙石集……一九〇
神道集……二一三
宝物集……三六四
（歴史物語・史論）
水鏡……四〇二
増鏡……三七二
愚管抄……一〇六
神皇正統記……二一五
（軍記物語）
保元物語……三五九
平治物語……三五一
平家物語……三三二
平清盛……三三〇
平重盛……三三三
平維盛……三三六
木曽義仲……三三八
源義経……三四二
女性群像……三四五
建礼門院徳子……三四九
太平記……三四一
曽我物語……三三六
義経記……九一
（日記・紀行・随筆）
建礼門院右京大夫集……一三七
たまきはる……二五七

うたたね……一五二
弁内侍日記……二五七
中務内侍日記……二六五
とはずがたり……二八二
竹向が記……二五〇
十六夜日記……二六
海道記……七四
東関紀行……二七六
方丈記……二六二
徒然草……二六九
（和歌文学）
新古今和歌集……二〇四
後鳥羽院……一五六
藤原定家……二二三
西行……一六八
式子内親王……二〇一
金槐集……一〇二
百人一首……二〇四
無名抄……四〇四
（連歌）
連歌……四三五
菟玖波集……二六四
新撰菟玖波集……二一〇
宗祇……二三四
心敬……二〇三
（能楽〈謡曲〉）
能楽……二九五
高砂……二四六
忠度……二五二
松風……二七九
隅田川……二二一
羅生門……四三一
＊
世阿弥……二二四
風姿花伝（花伝書）……二〇七
（狂言）
狂言……九八
末広がり……二一七
萩大名……二九七
付子……二一五
瓜盗人……五八
（幸若舞曲）
幸若舞曲……一四三
百合若大臣……四二三
（説経）
説経……二二八
山椒太夫……一七九
〔近世〕
（仮名草子）
恨之介……五六
竹斎……二六二
浮世物語……四六
伊曽保物語……二三
（浮世草子）
井原西鶴……二五
好色一代男……一三九
好色五人女……一四一
日本永代蔵……二九〇
世間胸算用……二二六
（黄表紙）
金々先生栄華夢……一〇四
（合巻）

修紫田舎源氏……二八八
（人情本）
春色梅児誉美……一九四
（滑稽本）
東海道中膝栗毛……二七三
浮世風呂……四四
（読本）
雨月物語……四八
春雨物語……三〇三
南総里見八犬伝……二八六
（浄瑠璃）
浄瑠璃……一九八
近松門左衛門……二五九
国性爺合戦……一四七
曽根崎心中……三三九
冥土の飛脚……四一〇
心中天の網島……二〇七
女殺油地獄……七二
仮名手本忠臣蔵……八四
菅原伝授手習鑑……二一八
義経千本桜……四二七
（歌舞伎）
歌舞伎……八六
伽羅先代萩……四二三
御摂勧進帳……一六〇
東海道四谷怪談……二七四
（俳文・俳諧）
松尾芭蕉……三七四
奥の細道……六四
去来抄……一〇〇
三冊子……一八〇
与謝蕪村……四二五
小林一茶……一五八
（狂歌）
狂歌……九五
（川柳）
川柳……三三二
（和歌文学）
香川景樹……七七
良寛……四三三
（随筆・評論）
花月草紙……七九
玉勝間……二五四
賀茂真淵……八九
本居宣長……四一五
源氏物語玉の小櫛……一三五
初山踏……四一
作者索引……四三七

◇解説文中に＊印の付してあるものは、本書に見出し項目として採録していることを示す。

執筆者（50音順）

飯塚恵理人　椙山女学園大学
生田勝彦　高知女子大学
石川透　慶応義塾大学
石破洋　島根県立島根女子短期大学
稲垣智花　武蔵野女子大学
上原作和　大東文化大学
大倉比呂志　昭和女子大学
緒方惟章　和洋女子大学
菊池真理子　穎明館中学・高校
黒石陽子　東京学芸大学
小室啓子　文教大学女子短期大学部
佐倉由泰　信州大学
塩田公子　岐阜女子大学
高橋啓之　日本大学
谷山俊英　都立城南高校
西沢正史　駒沢女子大学
西田禎元　創価大学
野沢拓夫　日本大学桜丘高校
萩野敦子　北星学園大学
原雅子　金蘭短期大学
宮谷聡美　駒場東邦中学・高校

古典文学の歴史概観

上代文学（大和・奈良時代）

上代文学は、人々の日常生活における労働・信仰・恋愛などにまつわる口承文学を起源としているが、その展開の大きな契機となったのは、大和時代の六四五年、中大兄皇子・中臣鎌足らによって断行された大化の改新である。大化の改新は、聖徳太子が行なってきた大陸の政治・文化の積極的な摂取の方針を発展させたもので、当時の中国大陸の統一国家であった唐の政治・文化を学び、わが国の発展を進めるという新しい政治革新であった。

まず、大化の改新における律令制度の確立によって、統一国家としての形態が整えられ、国家意識が著しく高まってきた中で、国史や地誌の編纂が計画され、書き継がれていった。『古事記』*と『日本書紀』は、統一国家としての意識の高まりのもとに、国家の歴史を体系づけた史書である。また、『風土記』は、地方の実情を調査し、統一国家の全体像を明らかにするために編纂されたものである。

これらの国家的な編纂物は、大化の改新による古代国家体制の確立と、統一国家としての国家意識の高まりを政治的社会的な背景としているものであるが、原始時代以来の、人々の生活と信仰の中から生まれた神話・説話・歌謡などの口承文学を集大成したものであるという文学的な意味を見出すことができる。したがって、そこには、次第に統一国家としての形態を整えていった大和朝廷の成立の歴史とともに、古代の人々の生活と思想が素朴な状態で展開されているといえよう。

さらに、大化の改新の立役者であった天智天皇（中大兄皇子）をはじめ、代々の天皇は、聖徳太子の政策を継承して、唐文化を中心とした大陸文化の積極的な摂取を基本方針とし、文化の進展をはかった。文学としてはとりわけ漢詩文を奨励したので、宮廷を中心に漢詩文が興隆し、個性豊かな漢詩人たちが登場した。そうした漢詩文の編纂時期とほぼ同じころ、『古事記』

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

や『日本書紀』に収録されている素朴な記紀歌謡の伝統を受け、宮廷人の間に広がっていた詩歌への大きな関心の中から、わが国最初の和歌集として、『万葉集』が編纂された。『万葉集』は、わが国における文学のはじまりから、古代国家の確立にいたる数世紀の間の和歌を集大成したもので、古代人の素朴な生活や思想を文学として伝え、新しい国家の建設と独自の文化の創造の息吹を示しているものである。『万葉集』は、平安時代の『古今和歌集』などの勅撰和歌集成立に少なからぬ影響を与えたばかりでなく、中世・近世・近代を通じて和歌文学の流れにも大きな影響を与えている。

中古文学（平安時代）

中古の文学は、桓武天皇が新しい都である平安京（京都）に移った八世紀末からはじまる。平安時代の初期には、新都における新しい宮廷において、『懐風藻』以来、高まりつつあった漢詩文隆盛の気運が最高潮に達した。

ところが、九世紀末の遣唐使の中止以後、漢詩文は急速に衰退し、国風文化の形成にしたがって、和歌が文学の主流を占めるようになった。十世紀初め、宮廷貴族文化の展開の中で、仮名文字が発達・普及し、『万葉集』以来、ひそかに命脈を保っていた和歌が再び息を吹きかえし、宮廷を中心として歌合が盛んに行なわれるようになった。そうした宮廷貴族文学としての和歌の隆盛という気運の中で、わが国最初の勅撰和歌集である『古今和歌集』が編纂された。

『古今和歌集』は、理知的・観念的で、優美繊細な歌風を有する点で、国風文化が確立された当時の宮廷貴族社会における、みやびやかで情趣的な気風を伝え、平安京の温和な自然の風光を背景にした平安朝文学の出発点となった。この『古今和歌集』以後、和歌文学は、宮廷社会における公的な文学として、貴族たちの間で盛んに行なわれ、多くの歌合やいくつかの勅撰和歌集・私家集として結晶した。

なかでも、『古今和歌集』に続く、『後撰和歌集』『拾遺和歌集』『後拾遺和歌集』『金葉和歌集』『詞花和歌集』『千載和歌集』などの勅撰和歌集や、独自の歌風を示

す『山家集』などの私家集が、平安時代中期から後期にかけての和歌文学の隆盛を物語るものである。

九世紀末から十世紀にかけて、和歌文学の隆盛とほぼ同じころ、物語文学や日記文学があざやかに花開いた。物語文学は、中国の物語・説話の影響を受け、仮名文字の発達や和歌文学の隆盛などにともなって、作り物語（創作物語）や歌物語が多数書かれた。『竹取物語』『宇津保物語』『落窪物語』などの作り物語は、古い時代の伝説や説話などの世界を基盤としながら、宮廷貴族社会の現実を反映した世界を形成している。

また、『伊勢物語』『大和物語』などの歌物語は、和歌文学の興隆を背景として生まれたもので、詠歌をめぐるエピソード、ある和歌にまつわる伝承など、趣味的な生活を営む貴族たちの文学的な日常性の中から汲みあげられた物語である。『源氏物語』は、それらの作り物語の流れを中心とし、歌物語や日記文学の流れを汲み入れつつ、藤原道長を頂点とする摂関政治を背景とした宮廷貴族社会の人間像を映し出している。

『源氏物語』以後に作られた『狭衣物語』『夜半の寝覚』などの物語は、藤原氏の摂関政治の衰退と、宮廷貴族社会の斜陽化を背景にして生まれたもので、『源氏物語』の模倣に傾き、非現実的・退廃的な世界を描き出している。とりわけ、その後に成立した『とりかへばや物語』『堤中納言物語』などは、藤原氏を中心とした摂関政治がくずれて、新しい政治形態である院政が行なわれた平安時代末期の貴族社会の現実を反映し、著しく退廃的な性格を有している。このような物語文学の傾向は、鎌倉時代の鎌倉時代物語（中世王朝物語）に引き継がれていくのである。

平安時代後期から末期にかけて、宮廷貴族社会の衰退にともなって生じた物語文学のゆきづまりは、事実性に基づいた歴史物語と説話文学という二つの新しい道を開いた。『栄花物語』から『大鏡』へと続く歴史物語の道は、上代の『日本書紀』以下の六国史を受け継ぐもので、藤原氏の動揺から院政の開始へとつながる、時代社会の変動期における貴族階級の歴史意識の目ざめの中で生み出されたもので、平安時代末期の『今鏡』を経て、中世の歴史物語へと続いてゆく。

もう一つの新しい道、『今昔物語集』を中心とする説話文学の道は、政治的地位の低下によって、文学的

な創造力を弱めつつあった貴族たちが抱いた過去の事件への関心、新興勢力としての武士階級の台頭による社会的事件の多発、仏教を広めるための僧侶の広い活動などによって開かれたものである。とりわけ『今昔物語集』は、平安時代末から鎌倉時代における、いわゆる説話文学時代の出発点となったばかりでなく、『平家物語』などの軍記物語の成立の原動力ともなった。

一方、平安時代の中ごろ、仮名文字による文章の一般化、和歌文学の隆盛の中で、宮廷歌人紀貫之は、政治的・公的なものを中心とする、男性の手になる漢文日記の形式をふまえながら、女性に仮託した『土佐日記』を書き、日記文学の先駆をなした。

平安時代の中期から後期にかけて、『土佐日記』に続いて現われた日記文学は、仮名文字の発達によって女性にも容易に文章が書けるようになったという事情に加えて、藤原氏の摂関政治を中心とする宮廷貴族社会の中で、教養のある、才能の豊かな女性が多く登場したことを背景に、宮廷女流日記文学としてさまざまに花開いた。

なかでも、『蜻蛉日記』『紫式部日記』『和泉式部日記』『更級日記』などの宮廷女流日記文学は、藤原氏の栄華を背景にし、自由で豊かな個性を発揮した王朝の中流女性たちが、宮廷社会における公的な生活や私的な心情を告白的に記したもので、いわば日記文学の黄金時代を形成し、中世における宮廷女流日記文学にも大きな影響を与えたばかりではなく、物語文学形成の一つの基盤をなすものであった。

また、宮廷貴族社会を背景にしながら、日記文学とは異なった自由な形式と精神で書かれた『枕草子』は華やかな宮廷社会に展開された、さりげない人間の哀歓をとらえており、日記文学や物語文学などともに、平安時代中期から後期にかけての藤原氏による摂関政治体制の中から生まれた、きわめて個性的な女流文学であるといえる。

中世文学（鎌倉・室町時代）

中世の文学は、源頼朝が鎌倉に幕府を開いた十二世紀末からはじまるが、前期と後期の二期に区分して考

えられる。鎌倉時代を中心とした前期の文学は、鎌倉の武家が政権をにぎっていたものの、京都の公家がまだ文化の主導権を保持していたので、公家と武家という二元性をもつものであった。それに対して、南北朝時代から室町時代を経て安土桃山時代に至る後期の文学は、公家の没落にともなって、僧侶・武家・庶民などの種々の階層に分化し、多様性と可能性をはらんだ新しい文学であった。

鎌倉時代初期、鎌倉の武家政権に対し、京都の朝廷では、*後鳥羽院が、王朝的な政治と文化を再興するという政策をとったので、公家文化が最後の花を咲かせ、和歌文学が大いなる隆盛を示した。平安時代の宮廷和歌の伝統を受け、大規模な歌合の流行の中で、第八番目の勅撰和歌集『*新古今和歌集』が編纂され、私家集『*金槐和歌集』や、歌論書『*無名抄』などが成立し、和歌文学の最後の黄金時代といわれる新古今時代を築いた。だが、その後の和歌文学は、公家階級の衰退・没落にしたがって、次第にふるわなくなり、鎌倉時代の末の勅撰和歌集である『*玉葉和歌集』などにおいて、わずかなきらめきを見せたくらいで、室町時代になると、*連歌に圧倒されて形骸化し、細々と余脈を保つにすぎなかった。

南北朝時代から室町時代において、武家・僧侶・庶民などの文学的活動の中で、文学的ないのちを失った和歌に代わって、連歌が興隆した。連歌は、古くから和歌の傍流として行なわれてきたが、平安時代以前の短連歌、鎌倉時代の長連歌を経て、南北朝時代には、二条良基が編纂した『*菟玖波集』によって、有心連歌として確立され、従来の和歌に代わって広く流行した。そうした気運の中で、室町時代には、連歌を専門とする連歌師が多数出現した。その中では、*宗祇が『*新撰菟玖波集』によって連歌を芸術的に完成し、*心敬が『ささめごと』において連歌論を展開した。だが、室町時代後期になると、町衆（都市の有力な商工業者）などの商工業者が経済的・文化的な実力をもちはじめ、連歌も急速に庶民化・卑俗化され、俳諧の連歌として大いに盛行した。俳諧の連歌は、室町末期、山崎宗鑑の『*新撰犬筑波集』が編纂され、広く流行し、さらに江戸時代初期の俳諧へと展開していった。

鎌倉時代には、政治の実権が武家政権である鎌倉幕

府に移った後も、京都の朝廷を中心とする公家政権がまだ存続し、公家文化を保持していたので、平安時代の物語文学の伝統を受け継いだ鎌倉時代物語（中世王朝物語）が多数作り出された。この鎌倉時代物語は、『松浦宮物語』をはじめ、『石清水物語』『住吉物語』などで、『源氏物語』などの王朝物語文学を模倣したものである。したがって、その鎌倉時代物語の世界は、中世的な仏教思想をも反映しているが、全体的に衰退・没落しつつあった公家の懐古的・退廃的な傾向を示している。むしろ、物語文学の総決算として、物語評論を展開している『無名草子』の方が注目される。

南北朝時代から室町時代を経て安土桃山時代に及ぶ中世後期には、うち続く戦乱によって公家階級が急速に没落し、代わって武家・僧侶・庶民などの種々の階層の人々が社会的にも文化的にも活躍した。この時期には物語文学や鎌倉時代物語の伝統を受け継いだ室町時代物語（御伽草子）が多数作り出された。室町時代物語は、物語文学の伝統を受け継ぎながらも、それだけにとどまらず、説話文学・軍記物語・謡曲・狂言などの種々の要素を多様に盛り込み、『文正草子』『物くさ太郎』『一寸法師』などにおいて、素朴で力強い庶民的世界を展開させている。

中世は、源平の争乱に始まり、南北朝の動乱を経て、戦国時代に至る戦乱の時代であったので、そこに戦乱を題材にした軍記物語が書かれた。この軍記物語は、平安時代に書かれた『将門記』『陸奥話記』を源流とし、鎌倉時代の『保元物語』『平治物語』『平家物語』、南北朝時代の『太平記』、室町時代の『曽我物語』『義経記』と続いている。なかでも『平家物語』は、中世文学の代表作として注目される。これらの軍記物語は、戦乱におけるさまざまな人間の姿を仏教的無常観や儒教的倫理思想によって描いたもので、琵琶法師や物語僧の語り物として広く流布し、さらに芸能・演劇の題材として大きな役割を果たした。

中世における歴史的な文学としては、軍記物語のほかに、鎌倉時代の宮廷公家社会を背景にして、歴史の大きな変動期の中で歴史意識に目ざめた公家の手によって、平安時代の歴史物語の伝統を受け継いだ『水鏡』『増鏡』が著わされ、また史論として『愚管抄』『神皇正統記』が書かれた。

鎌倉時代には、平安時代の宮廷社会と貴族文化への懐古的な姿勢をもつ公家や、民衆への仏教流布を目的とした僧侶は、過去の事件や教訓的な話に大きな関心を示し、いわゆる説話文学の時代を築いた。この説話文学は、平安時代末期の『今昔物語集』を受け継いだ、世俗説話集『宇治拾遺物語』『古今著聞集』、仏教説話集『発心集』『沙石集』などとして開花し、軍記物語・室町時代物語などの成立にも大きな役割を果たした。

一方、中世における日記文学は、しだいに斜陽・衰退の道をたどっていった宮廷公家社会を背景に、平安朝女流日記文学の伝統を継承して、『とはずがたり』などの女流日記文学が作られたが、おおむね記録的・懐古的・退廃的であり、公家の没落と運命をともにした。むしろ、鎌倉時代の商工業の発展による交通の整備を背景に成立した。『海道記』『十六夜日記』などの紀行文学や、乱世における無常思想によって世を捨てた隠者の手になる『方丈記』『徒然草』などの随筆文学の方が、中世の時代社会を如実に反映したものとして注目される。

南北朝時代から室町時代において、猿楽・田楽などの種々の芸能を総合した能楽（謡曲）・狂言が、宗教的な儀式を背景にして、わが国最初の演劇として成立した。能楽は、観阿弥・世阿弥が室町将軍足利義満の保護のもとに、芸術的に完成したもので、その後、浄瑠璃・歌舞伎などの芸能に大きな影響を与えた。一方、狂言は、笑いや風刺がこめられた庶民的な喜劇であり、室町時代物語などとともに、室町時代における庶民の明るく軽妙な世界を反映している。さらに幸若舞は、戦乱の絶えなかった室町時代に流行したもので、特に戦国大名の間で愛好されたが、江戸時代になって衰退した。

近世文学（江戸時代）

近世においては、江戸・大坂（現在の大阪）・京都などの都市を中心にして商工業が飛躍的に発達したので、武士が政治の実権をにぎっていたにもかかわらず、新興の町人層が、しだいに経済的・文化的な活動に大きな役割を果たすようになった。そうした中で、新しい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com